

キューバ、カリブ海プロ野球シリーズで最下位

2月1日からベネズエラのマルガリータ島で第56回カリブ海プロ野球シリーズが、キューバ、ドミニカ共和国、プエルトリコ、メキシコ、ベネズエラの5チームが参加して開催されました。今回は、キューバが54年ぶりにカリブシリーズに復帰し、キューバチームの試合ぶりが注目されました。キューバ国内ではむろんのこと、キューバチームの優勝が大方の予測でした。

優勝したメキシコチーム→



しかし、結果は、決勝戦でメキシコがドミニカ共和国を3対2で破り、優勝しました。しかも、期待と予測を大きく裏切り、キューバ代表のビジャクララ・チームは5チーム中最下位となり、昨年度のワールド・ベースボール・クラシック(WBC)での決勝ラウンドの成績とも合わせて、キューバ野球の低迷ぶりに、内外からいろいろな厳しい分析が寄せられています。

シリーズに参加したチームは、ドミニカ共和国のティグレス・デル・リセイ、プエルトリコのインディオス・デ・マヤーゲス、メキシコのナランヘロス・デ・エルモシージョ、ベネズエラのナビガンテス・デル・マガジャーンネス、キューバのナランハス・デ・ビジャクララでした。キューバ以外は、いずれも国内のプロリーグの優勝チームです。

カリブシリーズは、カリブプロ野球連盟が主催するもので、1949年に第1回シリーズが、キューバ、プエルトリコ、パナマ、ベネズエラが参加して行われ、キューバが優勝しました。その後1960年までキューバは、7回優勝していましたが、翌年の1961年からプロ野球を含むプロスポーツ全般を否定して参加を取りやめました。シリーズは、1962-1969年はキューバの脱退の影響から開催されず、1970年再開され、1971年からメキシコが新たに加盟しました。これまでに、ドミニカ共和国が19回、プエルトリコが14回、メキシコが8回、ベネズエラが7回、パナマが1回優勝しています。

今回、キューバチームは、1月31日初戦をメキシコと戦い、9対5で敗れました。打たれたヒットは15本、打ったヒットは7本の完敗でした、続く第2戦は、2月2日ベネズエラと戦い、8対5で敗れました。打たれたヒットは12本、打ったヒットは11本でしたが、この試合でも失策が



2つもあり、前半で6点奪われ、この試合も完敗でした。第3戦は翌日の2月3日、ドミニカ共和国と戦い、9対2の惨敗で、3連敗しました。打たれたヒットは12本、打ったヒットは5本、今回も失策が2つありました。第4戦は、2月4日にプエルトリコと戦い、

ピッチャーのオデリンが、プエルトリコ打線を2安打に抑え、2対1で辛勝しました。しかし、翌日、プエルトリコがベネズエラに5対4で勝ったため、キューバの準決勝進出の望みは絶たれるとともに、5チーム中最下位が確定しました。

試合内容を見ると、最初の3試合で失点は26点、打たれたヒットは38本、得点はわずかに12点で、打ったヒットは23本、防御率は8.0で投手陣が崩壊しました。失策も3試合で6つも記録し、守備の乱れも目を引きました。4試合の得失点差はマイナス14点で4位のプエルトリコがマイナス2点ですので、大きく水をあけられた最下位でした。

1980年、長島監督は、キューバを訪問してキューバ野球を目にして、「アメリカのメジャー・リーグ級の実力」とキューバの野球を絶賛しました（長島 茂雄『ネバーギブアップ—キューバの太陽カリブの海に誓う』（集英社1981年））。また、1988年に山本浩二監督が率いる広島カープがキューバを訪問し、親善試合を5試合行いましたが、キューバの4勝1敗で、山本監督は、完全に脱帽状態だったといえます（鉄矢多美子『熱球伝説—キューバ、リナーレスを育てた野球王国—（岩波書店、1997年））。その折、筆者は、たまたまキューバに滞在していて、何試合かを観戦しましたが、両チームのパワー、スピードにおける力量の差は歴然としていました。



ヘスス・マンソコーチ

では、国技といわれるキューバの野球がなぜ、このようなみじめな結果となったのでしょうか。キューバ国内でも様々な熱い議論が戦わされています。キューバ・ナショナル・チームの監督、闘将ビクトル・メーサは、「今回の選手の技能が劣っていたわけではなく、大事な時に球際に強くなかった。これを克服しなければならない」と述べています。政府系サイトの「クーバ・デバテ」は、「試合は、当然の結果を示した。一番まずい試合をしたところが除外されたのだ。投手陣は打ち込まれ、守備は悪かった。こういうまずい試合をするなら、勝つということは、空想的な願望になってしまう」と、厳しく批判しました。また、ビジャクララ・チームのコーチのヘスス・マンソは、「投手陣も、攻撃陣も最高の調子では臨まなかった。次回は、はるかに調子をあげて戦わなければならない」と準備不足を指摘しています。さらに同コーチは、「今、キューバには、抑え役、中継ぎ役、いいサウスポーがいない、155キロを超える球を投げれるピッチャーは少ししかない。投手の分業が未確立である」と反省しています。



←グリエル選手

さらに、キューバの野球の組織の在り方も問題とされ、「国内シリーズに16チームが参加するのは多すぎる。（質が低下するので）10チームで十分だ」という指摘も出ています。ビジャクララ・チームの主力選手であるユリエスキ・グリエル選手とアルフレド・デスパ

イネ選手は、「キューバは、もっと海外試合の経験をつまなければならない」と述べています。そこには経済困難から、海外試合を十分行えない事情があります。

このキューバ野球の「危機」を考えると、まず、キューバチームは、2006年以來、重要な国際大会で優勝していないことがあります。それまでは、ワールド・カップを25回、オリンピックを3回も制した輝かしい実績がありました。あるベネズエラの評論家は、「キューバのレベルが下がったわけではない。その他の国々のレベルがそれ以上に上がってきているのである」と指摘しています。

ところが、キューバ選手は、現在のアメリカの対キューバ経済封鎖や移民政策から一旦アメリカに「亡命する」とキューバに帰国できない事情があります。選手は、アメリカからキューバ政府にはドルを送金できませんし、家族には年間2,000ドルしか送金できません。しかし、他の4か国では、大リーグでプレーしている選手は180人程度おり、自国への送金も自由で、大リーグのシーズンオフの冬季には帰国して自国のリーグでプレーするのが普通です。そして大リーグの野球技術が、伝えられます。しかし、他の国に比べて十分キューバでは伝えられていないことがあります。



チャップマン投手

また、筆者には、やはりアメリカの経済封鎖が続く中、2000年以降、高給を求めてキューバからアメリカに「亡命した」野球選手は57名余に達していることも大きく影響しているように思われます。例えば、シンシナティ・レッズの抑えの切り札で常時球速160キロを誇るアロルディス・チャップマン投手は2012年に、ピッツバーグ・パイレーツのホセ・コントレーラス投手（大リーグで通算78勝67敗）は2002年に、マイアミ・マリーンズのホセ・フェルナンデス投手（2013年12勝6敗）は2008年に、アメリカに「亡命した」現役の選手です。またバッターでは、ロスアンゼルス・ドジャーズのヤシエル・プイグ（2013年打率3割2分4厘、本塁打19本）は2012年に、オークランド・アスレチックスのジョエニス・セスベデス（外野手、2013年のオールスターのホームラン競争第一位、年間本塁打26本）は2012年に、デトロイト・タイガースのホセ・イグレスィアス（2013年打率3割1分）は2008年に、シカゴ・ホワイトソックスの強打者ホセ・ダリエル・アブレウ（6年6,800万ドル=68億円契約）は2013年に、アメリカに「亡命」しています。

さらに、近年、キューバの若者の関心が、野球からサッカーに移っていることを指摘する人もいます。筆者も、昨年3月ハバナのセルロ基礎行政区にあるスポーツ都市付属の市民グラウンドの前を何度も通りましたが、子供たちや若者が遊んでいるのはほとんどサッカーで、野球は余り見られなかったことを思い出します。サッカーは、ボール一つあればよく、野球はグラブ、ボール、バットが必要で、非常時の経済困難が続くキューバの市民にとって、野球用具はなかなか入手できないものです。



来年度のカリブシリーズはプエルトリコで開催されることになっています。そしてキューバの招待も決まっています。メーサ監督は、「今回の結果から改善すべき点がよく分かった。よく準備して強いチームを送らなければならない」と言っています。

ビクトル・メーサ監督

(2014年2月11日 新藤通弘)